

養護教諭を目指す学生の模擬授業の 自己評価に関する一考察 －授業力自己診断シートを用いた試み－

落 合 賀津子
竹 崎 登喜江

北里大学看護学部

要旨

研究目的は、自作の学生版「授業力自己診断シート」を用いて模擬授業の自己評価を分析することによって研究授業に向けた課題を明らかにすること、および「授業力自己診断シート」の授業力向上に向けた貢献度を明らかにすることである。その結果から、研究授業に向けて「個および集団としての児童生徒理解」「児童生徒の反応を生かした対応力」が課題として明らかになった。また、「授業力自己診断シート」の一定の貢献度は証明されたが、研究授業に向けた不安軽減にはつながらず、集団を対象とした様々な体験活動の必要性が示唆された。

キーワード：養護教諭、模擬授業、授業力自己診断シート、授業力向上、自己評価

I. はじめに

都市化、少子高齢化、情報化等による社会環境や生活様式の急激な変化は児童生徒の心身の健康に大きく影響を与えており、いじめ、不登校、喫煙、飲酒、薬物乱用、性の問題行動、生活習慣の乱れなど、健康問題が複雑化・深刻化している。そのような現代的な健康課題に向けて、養護教諭の有する知識及び技能を教科保健に活かすことを目的に、平成10年に教育職員免許法の一部を改正する法律が公布・施行された。この附則15において「養護教諭の免許状を有する者（3年以上養護をつかさどる主幹教諭又は養護教諭として勤務したことがある者に限る。）で養護をつかさどる主幹教諭又は養護教諭として勤務しているものは、当分の間、第3条の規定にかかわらず、その勤務する学校（幼稚園を除く。）において、保健の教科の領域に係る事項（小学校又は特別支援学校の小学部にあつては、体育の教科の領域の一部に係る事項で文部科学省令で定めるもの）の教授を担当する教諭又は講師となることができる。」となった（教育職員免許法附則15）。それに加え、教員養

成全体に関しては、今日の教育現場での複雑化する諸課題に対応できる実践的指導力を備えた教員が求められるようになった（中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申、平成24年¹⁾）。

以上のように、養護教諭が一定の条件のもとで教科保健の授業を担当することが可能となり、さらに他の教員と同様に教育方法の実践的指導力が求められるようになってきている。本学では、養護教諭一種の免許状を取得するために修得しなければならない教育課程に関する科目として「教育方法論」が2単位30時間で設定され、この授業の最終段階では各々の学生が保健の教科に関する模擬授業を実践する。模擬授業は、教職課程における実践的指導力を育成する有効な方法として中央教育審議会答申に例示されており（中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（答申）、平成18年²⁾）、その有効性についても報告されている^{3、4、5}。近年、各都道府県および市町村教育委員会が実施する教員採用試験にも模擬授業が導入されており、養護教諭採用試験においても例外ではない。本学では模擬授業をより実践的なものとするために、教科保健の授業である「保健学習」あるいは「特別活動等における集団への保健指導」を養護実習で実践できるように各実習校へ依頼をしている。この積み重ねの中で授業力を向上させるためには、模擬授業における自己の課題を明らかにし、養護実習に向けてその課題に取り組む必要があると考えられる。実際には、模擬授業の直後に授業分析（相互評価・他者評価）を行い、最終的に課題レポートで自己の課題を明らかにしている。

そこで、この課題レポートによる振り返りに加え、授業の評価項目全体が網羅され、かつ具体的で客観的なツールを用いて自己評価をすることが、自己の授業における強み・弱みをより明確にし、研究授業にむけての取り組みがより具体的にできるものと考えた。また、同じツールを用いて養護実習の研究授業の自己評価をすることで、模擬授業との比較や残された課題と新たな課題を明確にすることができると考えられる。授業力向上の目的で、多くの地方自治体の教育委員会等において、授業評価の観点・項目を示した「授業力自己診断シート」や「チェックリスト」が作成され^{6~12}、自己評価や管理職の授業観察に活用されている。このような授業力をチェックするシートの有効性については、現職教員に関する報告¹³や教職課程の学生に活用した報告は一般教科に関してはある¹⁴が、養護教諭養成に関するものは見つからなかった。そこで本研究では、現職教員が活用している「授業力自己診断シート」や「チェックリスト」を参考にして作成した自作の学生版「授業力自己診断シート」を用いて模擬授業を学生に自己評価をしてもらい、さらに自己診断シートに関するアンケートを実施した。その方法は紙面ベースではなく、校務の情報化をねらい電子通信機器を通して行った。

この研究の目的は、一つ目として自作の学生版「授業力自己診断シート」を用いて模擬授業の自己評価をさせ、その結果を分析することで授業力向上へ向けた課題を明らかにし、「教育方法論」の授業並びに「養護実習事前指導」の一層の充実と改善に資することで

ある。また、二つ目の目的は「授業力自己診断シート」の授業力向上に向けた貢献度を明らかにすることである。

II. 実施方法

1. 授業力自己診断シートの作成

1) 授業力の構成要素および診断項目の作成 (表1)

(1) 各都道府県及び市町村教育委員会で作成・実施している「授業力」を評価・改善するためのシートに関する情報を収集した。以下に参考とした各教育委員会の資料を示す。

- ①神奈川県立総合教育センター、高等学校版 授業改善のための授業分析ガイドブック、平成20年：「授業の準備・教材の工夫」、「授業の充実」、「授業の進め方」、「生徒主体の授業の工夫」、「説明のわかりやすさ」、「生徒への接し方」の6項目。授業技術と教材解釈・開発が中心となる記録シートである。
- ②東京都教職員研修センター、「授業力」診断シート活用資料集：「使命感・熱意・感性」、「児童・生徒理解」、「統率力」、「指導技術」、「教材解釈・開発」、「指導と評価の計画の作成・改善」の6要素。準備から評価、使命感にいたるまで項目立てをしている。
- ③埼玉県立総合教育センター、「授業力」診断シート：「授業力を支える学習集団を形成する力」、「児童生徒を理解する力」、「教材を解釈し授業を構想する力」、「授業を実践する力」の5分類。それぞれの分類に診断項目、具体項目例が細かに示されている。
- ④千葉県教育庁南房総教育事務所、活用する力を高めるセルフチェックシート：1単位時間の授業についての活用を想定して作成されている。「導入（導入でしっかりと問題意識をもたせたか）」、「展開（学習問題を解決するための工夫をしたか、考えを整理する場を設けたか、考えを深める場を設けたか）」、「まとめ（本時の学習のまとめをしたか）」の3過程から構成されている。
- ⑤群馬県教育委員会事務局吾妻教育事務所、「授業づくり！押さえてほしいポイント」チェックシート：1時間の授業についての活用を想定して作成されている。「ねらいについて」、「学習活動について（実態の把握、課題の工夫、中心的な学習活動の工夫、個に応じた指導の工夫）」、「学習活動の適切な評価について」の項目で構成されている。授業づくりを行う際に押さえてほしい基本的な項目となっている。
- ⑥逗子市教育研究所、授業についての自己チェックリスト解説～だれにでも、わかりやすい授業をめざして～、平成27年：発達障害のある子どもを視野の入れたチェックリストである。「授業の土台作り」、「学習環境」、「授業の構成」、「教材」、「子どもの参加」、「学習支援」の6項目に分類されている。

以上の中から、項目が全体的に網羅され小・中・高等学校の児童生徒に共通した一般的

な内容であることから、東京都教職員研修センターで使用されている「授業力診断シート」の診断項目の構成要素を参考に自作の学生版「授業力自己診断シート」を作成した。参考としたシートの授業力を構成する要素は「使命感・熱意・感性」「児童・生徒理解」「統率力」「指導技術」「教材解釈・教材開発」「指導と評価の計画」の6要素であったが、学生の模擬授業・研究授業は1単位時間で行い、また養護実習の中で年間の指導計画等を立案することはないことから「指導と評価の計画」の要素を削除した5要素とした。模擬授業の場合は「学校・地域の特色を考慮する」「児童・生徒の実態を考慮する」必要がないことから診断項目から外した。結果として上位尺度5要素および下位尺度33項目とした（模擬授業では31項目となる）。

表1 「授業力自己診断シート」診断項目

	要素	診断項目
1	使命感・ 熱意・ 感性	学習のねらいをすべての児童・生徒に達成させようとしている。
2		教材研究を行って授業に臨んでいる。
3		ものごとに対する幅広い関心をもっている。
4		心と体の調子を整えて授業を行っている。
5		明るく前向きに児童・生徒に接している。
6	児童・ 生徒理解	児童・生徒一人ひとりの学習意欲を把握しようとしている。
7		児童・生徒一人ひとりの本時の学習の達成状況を把握しようとしている。
8		児童・生徒一人ひとりの変化を把握しようとしている。
9		児童・生徒一人ひとりに気を配り、言葉かけをしている。
10		児童・生徒の発言や行動を共感的に受け止めている。
11	統率力	学習にふさわしい環境づくりを心掛けている。
12		基本的な学習ルールを定着させている。
13		的確な指示を出して集団を動かしている。
14		学習のねらいを明確に示し、学習に見通しをもたせている。
15		児童・生徒の反応や変容に気付き、授業に生かしている。
16		学習状況に応じて適時・的確な判断を行っている。
17	指導技術	児童・生徒に学習の準備についての的確に指示している。
18		授業の始めに学習のねらいを児童・生徒に明確に示している。
19		個に応じた指導を行っている。
20		児童・生徒が自ら考えたり、自ら取り組んだりする主体的な学習を促す工夫を行っている。
21		教材・教具を効果的に活用している。
22		発問の工夫をしている。
23		児童・生徒の反応を生かしながら、授業を構成している。
24		分かりやすい説明をしている。
25		効果的な板書をしている。
26		授業のまとめを工夫している。

27	教材解釈・	教科等の専門的知識を深めている。
28	教材開発	日頃から教材に関連する幅広い情報を収集している。
29		学習のねらいを明確に把握して教材解釈や教材開発をしている。
30		学校・地域の特徴を考慮して教材解釈や教材開発をしている。
31		生活との関連を意識して教材解釈や教材開発をしている。
32		児童・生徒の実態を考慮して教材解釈や教材開発をしている。
33		児童・生徒に興味・関心をもたせるための教材解釈や教材開発をしている。

2) Excelシートの作成

診断項目ごとに4段階評価（1：あてはまらない 2：あまりあてはまらない 3：だいたいあてはまる 4：あてはまる）で数字を入力し、構成要素ごとの平均がレーダーチャートグラフに反映され、数量化・可視化できるようにした。模擬授業後の実施を1回目、養護実習での研究授業後の実施を2回目とした。また、診断シートやレーダーチャートの結果を参考に、自分の強み、弱み、養護実習での授業に向けて取り組む課題を自由記載できるようにした。

3) 「授業力自己診断シート」への入力方法、提出方法に関する説明について

(1) 説明実施日：平成27年8月26日

(2) 倫理的配慮

「授業力自己診断シート」およびアンケートの提出は辞退できること、個人の特定はされないこと、また提出の有無や自己評価・アンケート結果が「教育方法論」「養護実習」の成績評価には関係しないことを口頭で説明し、8名全員が了承した。

(3) 入力方法、提出方法について

Excelで作成した「授業力自己診断シート」のフォーマットを対象学生にメール送信し、入力後期日以内にメール返信してもらうように伝えた。入力方法は口頭および紙面で説明した。

2. 実施対象

平成27年度「教育方法論」を履修し、模擬授業を実施した本学看護学部4年生8名

3. 「教育方法論」の概要と模擬授業の進め方について

授業の時期は平成27年4月から7月であった。学習指導案の講義の後、担当教員による学習指導案の個別指導を数回行い、模擬授業前日にリハーサルを実施した。模擬授業は平成27年7月1日に3名、7月8日に3名、7月15日2名が実施した。授業者以外の学生が児童・生徒役を担当した。模擬授業後、児童・生徒役の学生および教員は「授業分析シート」（授業展開、説明・発問・指示の仕方、声の大きさ・めりはり、態度、誤字・筆順、等）を記載し授業者に渡した。模擬授業終了後、模擬授業研究会で振り返りを行った。児童・生徒役の学生一人ひとりが感想を述べ、その後教員から改善すべき点を含めて講評を行った。最後に授業者からの感想が述べられた。修正した学習指導案、レポート課題「模擬授

業を終えて」をもとに総合的な評価を行った。

4. 「授業力自己診断シート」に関するアンケートの作成

「授業力自己診断シート」の貢献度の確認とシート改善を目的としてアンケートを作成した。内容は「授業力向上に役立ったか」、「どのような点で役立ったか」「診断項目数は適切だったか」、「診断項目の表現のわかりやすかったか」、「自由記載による意見・感想」等とした。アンケートは「授業力自己診断シート」入力と同時に行うこととした。

Ⅲ.結果

1. 模擬授業に対する「授業力自己診断」の結果

1) 5要素31項目について（表2、図1）

5要素を構成する下位項目数は、「使命感・熱意・感性」5項目、「児童・生徒理解」5項目、「統率力」6項目、「指導技術」10項目、「教材解釈・教材開発」5項目の計31項目である。それぞれの要素の平均値、最大値、最小値、標準偏差は表2、平均値のレーダーチャートグラフは図1に示した。「使命感・熱意・感性」の平均値が3.46と高く、低かった要素は「統率力」2.88、「指導技術」2.91であった。

表2 模擬授業に対する「授業力自己診断」の結果

5要素 学生	要素ごとの平均得点				
	使命感・ 熱意・感性	児童・ 生徒理解	統率力	指導技術	教材解釈・ 教材開発
A	3.2	2.8	2.8	2.4	3.0
B	3.8	3.8	3.5	3.8	3.6
C	3.4	2.6	2.7	2.7	2.8
D	3.4	3.4	2.8	2.8	3.2
E	3.8	3.6	3.3	3.8	3.2
F	3.8	3.0	2.5	2.5	2.6
G	3.0	2.0	2.2	2.2	2.0
H	3.0	3.6	3.2	3.1	3.4
平均値	3.46	3.10	2.88	2.91	2.98
最大値	3.8	3.8	3.5	3.8	3.6
最小値	3.0	2.0	2.2	2.2	2.0
標準偏差	0.35	0.61	0.43	0.61	0.50

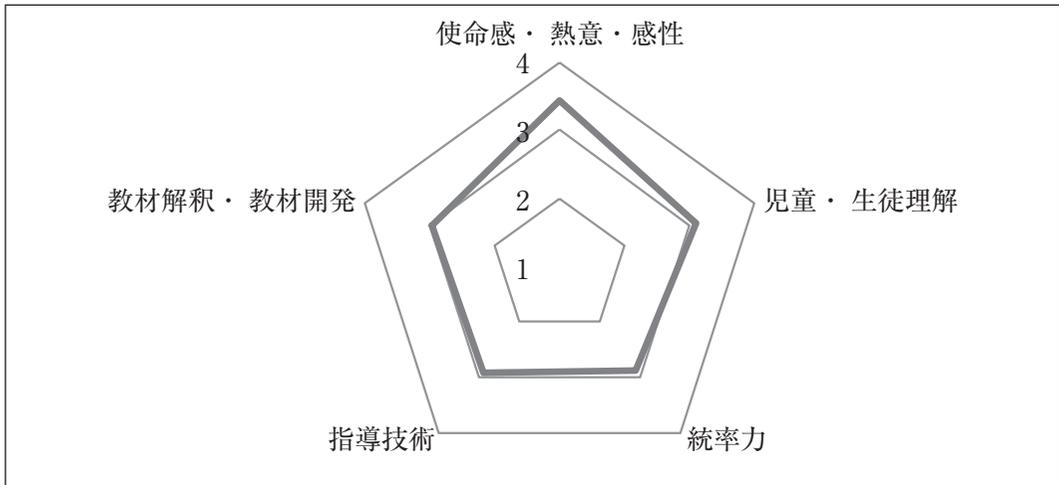


図1 要点ごとの平均点

2) 授業力における強み、弱みについて (表3)

授業力における強み、弱みとして認識した内容を表3に示した。強みは「使命感・熱意・感性」が7名と多く、5要素の平均値が一番高い項目と一致していた。弱みは「統率力」6名、「指導技術」4名と平均値が低い項目と一致していた。

表3 授業力における強み、弱みについて

	強み	弱み
A	使命感・熱意・感性	指導技術
B	使命感・熱意・感性	統率力、教材解釈・教材開発
C	使命感・熱意・感性	統率力、児童・生徒理解
D	使命感・熱意・感性	指導技術、統率力
E	使命感・熱意・感性	統率力、教材解釈・教材開発
F	使命感・熱意・感性	指導技術、統率力
G	使命感・熱意・感性	児童・生徒理解
H	児童・生徒理解、教材解釈・教材開発	指導技術、統率力

3) 授業力において平均点が低く、かつ弱みと認識した「統率力」、「指導技術」について

(1) 「統率力」の下位項目の中で最も低かった項目

「統率力」の下位項目の中で自己評価の平均値が最も低かったものは「学習状況に応じ適時・的確な判断を行っている」の2.38であった。

(2) 「指導技術」の下位項目の中で最も低かった項目

「指導技術」の下位項目の中で自己評価の平均値が最も低かったものは「個に応じた指導を行っている」の2.38であった。

4) 自己評価および養護実習の授業に向けての取り組みについて

自由記載から共通する内容を以下のようにカテゴリー化し分類した。()内は記載した人数を示す。()がないものは1名の記述である。

①個および集団としての児童生徒理解の難しさと必要性

- ・生徒一人ひとりに目を配り、全体に配慮しながら指導することが難しい。
- ・個々に合わせた指導が弱い。
- ・マイノリティの把握と配慮が必要である。
- ・生徒の学校生活の様子、生活背景から考えられる健康課題を抽出し、生徒のニーズに即した授業としたい(3)。
- ・学校の目指す生徒像、指導観を織り交ぜた授業準備をしたい。
- ・発達段階に合わせた指示が必要である。
- ・授業をするまでに児童生徒の観察・把握が必要である。
- ・集団のアセスメントが必要である。
- ・学級全体を見渡せるようにしたい。

②児童生徒の反応を想定する必要性および反応を生かした対応の難しさ

- ・事前に生徒の反応をもっと想定しておく必要があった(2)。
- ・想定される反応に対する対応方法も考えておくと余裕を持てたと思う。
- ・反応を生かした対応が難しい(2)。
- ・想定していなかった反応に適切に対応できなかった。

③児童生徒理解や統率することは研究授業では困難となるであろうという予測

- ・生徒役を関係のあるよく知った仲間が演じていることから、性格に応じた対応ができたが、実際の授業では難しいであろう。
- ・日ごろから接しているメンバーであることから、生徒理解の評価は高く出ているが、実際は短い時間で理解しなければならないため、課題となるだろう。
- ・実際の授業では生徒数も多いため、集団指導を行う場面を意識して準備をしたい。
- ・実際の授業では自分の想定通りに授業が進行するとは考えにくい。

④教材解釈・教材開発等の充実の必要性

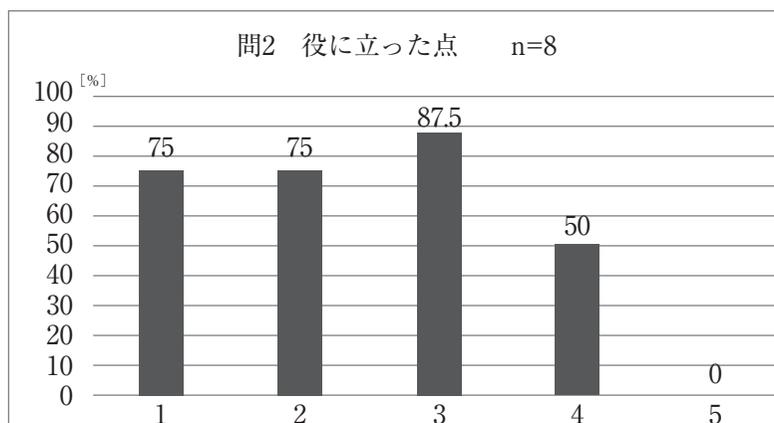
- ・取り扱った単元が抽象的だったので、教材教具の活用の研究、指導の工夫が必要だった。
- ・身近で実生活に基づいた授業展開の視点が必要であった。
- ・模擬授業では事前準備に時間をかけ指導案の指導していただいたことから、余裕がある状態で生徒と向き合うことができた。
- ・教材研究を十分に行うことで落ち着いて授業をしたい。
- ・教材研究のために日常生活の中で健康問題に関心を持ち、情報を積極的に収集したい。

2. 授業力診断シートの貢献度について

1) 授業力自己診断シートは役立ったか

「問1 授業力自己診断シートは自分の授業力向上などに役立ちましたか。」に対する回答結果は「非常に役に立った」25%、「ある程度役に立った」75%、計100%であった。

「問2 授業力自己診断シートはどのような点で役に立ちましたか。」に対する回答結果を図2に示した。



1. 授業力に必要な要素・項目を確認することができた
2. 授業力に必要な要素・項目の中の自分の強みを把握することができた
3. 授業力に必要な要素・項目の中の自分の弱みを把握することができた
4. 養護実習の授業に向けての取り組みを確認できた
5. 養護実習の授業に対する不安が軽減した

図2 授業力向上に役立った点（複数回答）

学生全員が授業力自己診断シートを「ある程度役立った・非常に役立った」と回答していた。役立った点は「授業力に必要な要素・項目を確認できた」、「強み・弱みを把握できた」という回答が多かった。「養護実習の授業に対する不安が軽減した」という学生は0%であった。

2) 授業力自己診断シートの各項目数の適切さ・各項目の文章のわかりやすさについて

「問3 授業力自己診断シートの項目の数についてはどう思いましたか。」「問4 「授業力自己診断シート」の各項目の内容(文章)についてはどう思いますか。」に対しては、全員が項目数を「適切」、文章については「わかりやすい」と回答した。

3) 授業力自己診断シートを今後も続けた方がいいか

「問5 授業力自己診断シートを今後も（来年度以降も）続けた方がいいと思いますか。」に対する回答は「続けた方がいい」62.5%、「どちらかというとなつた方がいい」37.5%、計100%であった。

4) 「授業力自己診断シート」についての意見・感想について（自由記載）

授業力自己診断シートに関する意見・感想を以下のようにカテゴリー化し分類した。

() 内は記載した人数を示す。() がないものは1名の記述である。

①自己の課題が再確認できた

- ・特に弱みの部分を確認することができ、今後の自己の課題として再認識できたため、養護実習の準備として適切である(4)。
- ・このシートは、自分自身で授業を見つめ直し次に生かすことが出来る。

②レーダーチャートで表されているため、強み・弱みが客観的にわかりやすい

- ・レーダーチャートで結果が出るので、視覚的に捉えられてわかりやすかった(3)。
- ・チャートになって可視化されるため、自分の強み・弱みを客観的に把握できてよかった。

③簡単で入力しやすい

- ・模擬授業を実施するたびに時系列で自分の振り返りをする事ができ、入力方法が簡単なので記録し続けやすいと思った。
- ・思ったより簡単ですぐできた。
- ・入力時間が適切で簡単だった。

④実施時期の改善

- ・授業後すぐに行えたらさらに良いと思った。

⑤他者評価との比較が必要

- ・教職課程の先生方にも用いてもらうことで(模擬授業の時間などに)、自己評価と他者評価との比較を行なうことも、非常に自身の参考になるのではないかと思った。

IV. 考察

「授業力自己診断シート」を用いて模擬授業を4段階で自己評価をした結果、5要素の中で平均点が一番高かったのは、「使命感・熱意・感性」であり、学生自身が自分の強みと認識した要素と一致した。看護学部の過密なカリキュラムの中で「養護教諭」を志望した熱意のある学生達であることから、模擬授業に対しても強い熱意・誠意をもって取り組んでいたと思われる。平成9年7月の教育職員養成審議会第一次答申(1997)の中では「教員として最小限必要な資質能力」の一つとして「教員としての使命感や責任感、教育的愛情を持つこと」であるとしている¹⁵。この学生の使命感・熱意を大切に、持続していけるような教育が必要である。一方、平均点が低かった要素は「統率力」、「指導技術」であり、自分の弱みと感じた要素とほぼ一致した。「統率力」および「指導技術」の構成要素である下位項目の中で最も平均点が低かったものは、それぞれ「学習状況に応じて適時・的確な判断を行っている」「個に応じた指導を行っている」であった。同様に、これらの項目の内容が自己の課題であると認識されていることは、自由記載で表された内容からも明らか

かになっている。

まず、「学習状況に応じた判断」の点数の低さは、「反応を生かした対応の難しさ」と複数の学生が記載していることに表されている。実際の模擬授業の中で、学習指導案作成の段階では想定していなかった反応がありそのことに戸惑った体験から、状況に合わせて判断し授業を進めていくことの難しさと必要性を実感したと考えられる。そのためには、事前に起こり得る児童・生徒の反応を想定しておく必要があることに気付いている。

次に「個に応じた指導」の点数の低さは、「個々に合わせた指導が弱い」「全体を見ながら生徒一人ひとりに目を配ることが難しい」「マイノリティの把握と配慮」等の記載に表されている。つまり、児童・生徒一人ひとりを個として理解しながら、全体を把握し授業を進めていくことの難しさと必要性を実感したと考えられる。

他に複数の学生が自由記載していた内容としては、「児童生徒の学校生活の様子や生活背景から健康課題を抽出し、ニーズに即した授業をしたい」であった。また、「学校の目指す生徒像、指導観を織り交ぜた授業をしたい」「集団のアセスメントが必要」という意見もみられた。つまり、「個の理解」だけではなく「集団としての児童・生徒の理解」の必要性を強く感じており、研究授業に向けて取り組む課題として認識できている。しかし、模擬授業では授業対象とした人数が少なく、すでに知っている仲間が児童・生徒役をしていることから「個および全体としての児童・生徒理解」に関する学びの限界性がある。このような学生を児童・生徒に見立てた模擬授業の限界性については山崎・杉山¹⁶も指摘している。学生自身もこの限界性を認識しており、自由記載の中で「生徒役を知っている仲間が演じていることから対応できたが、実際の授業では難しいであろう」「実際の研究授業では短時間で児童・生徒を理解しなければならないため課題となるだろう」「実際の授業では生徒数も多いため、集団指導を意識して準備したい」と課題を記している。自己評価では、「児童・生徒理解」の診断項目の平均点は3.1であり低くはなかったが、模擬授業であったことから低い評価とならなかったと考えられ、学生自身もこの点に気付いていた。このような学びを認識したことは、実際の児童・生徒を対象とした実践的な学びにつながっていくと思われる。

この「個および集団としての児童・生徒理解」に関する能力の獲得は、4年間の学生時代の学びだけでは難しく、児童・生徒との実際の関わりや授業を積み重ねることが必要である。また、前述した「児童・生徒の反応を生かした対応力」、つまり児童・生徒の反応に臨機応変に対応する力も同様であろう。教職課程の中でこれらの能力を少しでも伸ばすためには、模擬授業をより実際の授業に近いものに工夫する必要があるであろう。例えば、学生が児童・生徒の発達段階を理解し役割になりきるだけでなく、教員も児童・生徒になりきって参加するのである。その中で、学生の能力に合わせて「想定されていない反応」を意図的に教員が演じるという方法も考えられる。ただし、学生が対応できないことによって自信を喪失しモチベーションを下げることはないように配慮する必要がある。

教材解釈・教材開発に関しては、教材研究を十分に行うことの必要性を学んでいる。「事前準備に時間をかけたことで余裕が持てた」「教材研究を十分行うことで落ち着いて授業をしたい」という意見からわかるように、精神的に落ち着いて授業に取り組むためには「教材解釈・教材開発」が大切であることに気付いている。模擬授業の事前個別指導が担当教員より丁寧を実施されたことで授業が比較的思うように進んだと実感しており、達成感も感じている。研究授業においてもこの経験をいかして十分な準備が可能になると思われる。

以上のように模擬授業からの学びは今後の実践につながる有効なものであった。これまでも模擬授業の有効性に関しての報告は多数みられ、特に相互評価の有効性について報告されている^{17, 18}。本校の模擬授業においても、相互評価の機会として授業終了時に「模擬授業研究会」を設けた。学生が他の学生の授業を分析的に評価することは自らの授業を作り上げる上で重要であり、この研究会での相互評価が個々の課題認識につながったものと考えられる。

近年、教育評価に関しては、教師による「他者評価」、級友からの「相互評価」、自らが行う「自己評価」を学習者の発達段階に即し授業過程の中に組織していくことが求められている¹⁹。この「自己評価」の目指すところは、学習者の学習活動への主体的参加、自己理解の深化、自己教育力の強化である²⁰。つまり、学習者を評価の主体として位置づけることで主体的な学習力を形成することである。また、「自己評価」のプロセスとは、自己の学業、行動、性格、態度などについて何らかの指標をもとに情報などを得て、その後の学習や行動を改善、調整する一連の行動²¹とされる。本研究では模擬授業の授業力を自己評価するために「授業力自己診断シート」を視標として用い、省察することで課題を明らかにした。この視標の貢献度はアンケートの結果で「授業力に必要な要素・項目を確認できた」「強み、弱みを把握できた」「レーダーチャートグラフで表されるためわかりやすい」「入力が簡単」という理由ですべての学生が役立ったと感じ、また、診断項目数の適切さや文章表現のわかりやすさについても肯定的な回答であり、来年度以降も継続してほしいという意見であった。さらに、前述したように「個および全体としての児童・生徒理解」「児童・生徒の反応を生かした対応力」「教材研究を充実させる必要性」が個々の学生の中で課題が明確となったことから、「授業力自己診断シート」の貢献度は高かったといえる。また、Excel表に入力しデータ化することの成果は、校務の情報化・効率化というだけではなく、学生自身が簡単に短時間でできることを実感したことから、自主的かつ継続した活用につながることを期待される。しかし、自己評価に関する問題としては客観性や妥当性の低さが考えられる。本研究では模擬授業研究会において教員による他者評価・学生による相互評価がなされた上で自己評価を実施しているため、ある程度の客観性・妥当性は保たれていると思われる。ただし、学生の意見にもあるように自己評価の提出を最終レポート提出と同時期にすることや同シートを用いた教員による他者評価など、改善していかなければならない課題は残されている。

以上のように一定の貢献度は証明されたが、自己評価をすることが「研究授業へ向けての不安軽減」にはつながることはなかった。自己の課題や取り組むべき内容を明らかにできても不安軽減につながらなかった理由としては、模擬授業が一回のみである限界や集団の子どもに関わる実践の少なさが考えられる。それまでの学生の実践活動は主に3年間の看護学臨地実習である。あらゆる発達段階にある、個としての対象に対し看護や保健指導を実践してきている。対象の身体・心理・社会的側面から広く情報を収集し、個別性のある看護計画や保健指導計画を立案し、実施および評価をし、さらに計画修正まで実施している。この思考過程は、授業の構成・実施・省察という一連の授業実践のプロセスと共通している。3年間の看護学臨地実習をクリアした看護学生には、看護実践の思考過程を学習したことから授業実践の省察に求められる思考がある程度身につけていると考えられる。しかし、集団を対象とした実践はほとんどないことから、模擬授業を一度経験し課題が明確になっても、実際の児童生徒への授業に対する不安は残るのであろう。この点を補うためには、3年次の休業期間等を利用し、小中学生を対象としたキャンプやレクリエーション活動のボランティアなどで集団指導の体験を積み重ねることも有効ではないかと考える。また、自己評価の結果から明確になった学生の課題を実習担当教員と共有し、養護実習期間も含めた継続的なフォローが必要であろう。

今回は対象学生が8名と少なく、統計学的な分析が十分できなかった。今後も模擬授業において「授業力自己診断シート」を活用し、データを積み重ねることで分析を深め、学生の指導に活かしていきたい。

V. 文献

1. 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申，平成24年8月28日。
2. 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申，平成18年7月11日。
3. 熊谷信順：教育実習生の「学習指導技量」形成に寄与する教育実習事前指導の構築（4）～模擬授業生徒役による授業評定と教育実習指導教員による学習指導法評価の関係，東亜大学紀要，11：51-62。
4. 山崎敬一，杉山雅俊（2014）：模擬授業による理科の授業力量の形成に関する研究～教師志望学生への質問紙調査から～，学校教育実践学研究，20：79-89。
5. 横田久貴（2014）：教職課程（教科教育）における模擬授業の効果的実践 札幌国際大学教職課程実践講座報告，札幌国際大学紀要，45：99-108。
6. 神奈川県立総合教育センター（2008）：高等学校版授業改善のための授業分析ハンドブック。

7. 神奈川県立総合教育センター (2015) : 高等学校初任者のための授業づくりガイド.
8. 東京都教職員研修センター : 「授業力」診断シート活用資料集, <http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/> (アクセス日2015年6月1日).
9. 埼玉県立総合教育センター : 「授業力」診断シート, <http://www.center.spec.ed.jp/> (アクセス日2015年6月1日).
10. 千葉県教育庁南房総教育事務所 : 活用する力を高めるセルフチェックシート, <https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/kj-nanbou/> (アクセス日2015年6月1日).
11. 群馬県教育委員会事務局吾妻教育事務所 : 「授業づくり! 押さえてほしいポイント」チェックシート, <http://www.pref.gunma.jp/03/y1110011.html> (アクセス日2015年6月1日).
12. 逗子市教育研究所 : 授業についての自己チェックリスト解説～だれにでも、わかりやすい授業を目指して～, <http://www.city.zushi.kanagawa.jp/syokan/kenkyu/> (アクセス日2015年6月1日).
13. 清水公男 (2013) : 現職英語教師の自主的な学びを促す授業実践行動チェック (評価) リスト Ver.1.1 の開発, 中部地区英語教育学会「紀要」, 42 : 227-234.
14. 内田雄三 (2013) : 教育実習事前指導における指導内容の検討～保健体育科模擬授業に関する学生の記述内容の分析を通して～, 白鷗大学教育学部論集, 7 (2) : 391-405.
15. 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」第一次答申, 平成9年7月.
16. 再掲 4
17. 本郷健 (2009) : 授業相互評価システムを利用した教育実習指導の試み, 年会論文集, 25 : 128-131.
18. 再掲 14
19. 小野賢太郎, 他 (2015) : 教師を目指す人のための教育方法・技術論, 学芸図書 : 119-125.
20. 梶田叡一 (1974) : 教育における評価の理論, 金子書房 : 91-100.
21. 橋本重治 (1983) : 指導と評価 教育評価基本用語解説, 日本教育評価研究会誌臨時増刊号, 29 (8) : 38.